





伊勢文

七七

門 凡 呂  
323  
卷 2

東遊記卷之二

松前の津波

奥州津波領之金と云ふ事や松前津波の巻

少く其間終小七里に隔しきり女方山に乃

鼻お除きたる事之口里斗もく七連と云

けたる金よ遠き一一夜は家のくまわら

の老人がめまは家内の子大祖母おち集り

圍炉裏まはし居し〜口方山は物持し〜に

彼者た渡り〜おし世ニ云十年〜おち









方とんやまをりり 志白めく 雷姑山乃こた  
 この遠小をゆあまさんよ又婦まかなるこもの海  
 よ出来まをしこいふうちよだんく小をりあ  
 ありこをく見えし 鳴山のとどお然しこくあふま  
 に大浪乃あふあふこすの津波をりよ也 途こ老  
 若男女我まばりて 途迷ひしこくまばしこ方に  
 おあて 民屋田畑草木禽獸まをり少くもあふ  
 海底はみくらと 會ひ生あふ人民海邊の村里  
 小いま人もふし 我くも遠まをりよこ浪敷

り 里は沖よりあふりて 其島まをりて 中乃こく 破  
 途の浪とあふまをひしこくまをりて 其れは只一ま  
 みくまをりしこくあふまをりて 其れは只一人なり 扱  
 こや 初小神くのや中と居たり 途ひくは 大  
 愛あふるまをりて 其れは 世地と途まをりて 途  
 一まをりて 其れは 途まをりて 途まをりて 途  
 途まをりて 其れは 途まをりて 途まをりて 途  
 えくまをりて 其れは 途まをりて 途まをりて 途  
 海國の脚に附石見は 途まをりて 途まをりて 途



海乃底より潮をさぐるもあしく川と逢ふゆりより潮の  
 枯し一羽をく大よ路をた大夏ありし時きあひ海  
 嘯くふものあしくやおつひも... 河を... 年  
 月世はふあまよりす人く山海遠はけ時皆何あり  
 海の底大よ潮湧をりもく時... 何と又  
 あくもいひ... 被松糸の股せんまの... 北溟一  
 面小あまき... とみへり減ふ希代乃路よりくね又  
 海世のくはるあまなる... けり  
 冥氣指と落ス

小國乃人... 氣のゆらぐ... 比豆の指皆... いろ小... 病人と... なるべし... るやあ... ば拵び... 畜...

身は... 卷之二







道跡泥田のつくつたる時を脱まで七濡して其爪  
 先れたく人養を包くても雪おまをく遠くして其  
 は多うささ鉄地も徹つて只今も子息を育ち切ま  
 ぬくせえゆる横さぬおぼる雪吹ましく鉄巾の  
 くるより肩おぼく甚言看毛う張り付看毛の先  
 らく白くワラ、のゆくむくあり夕ぐに若ぬま  
 ても草鞋脚付せゆるま解けに破比の者甚  
 圍が裏ゆくべ遠くいふや初のはまあやしく  
 のりくくと踏つて御まのど付まゝあはれおのく

小豆をくい流るまはさく火のあつては  
 芝ふじや、ぬくしく流る水解けろ滴りか  
 ほとけをく足袋草鞋もふくくくく氷  
 ても付て石はくくにかりつけざる事ま  
 しく小地もくちぬましくく又作ら  
 ぬりたるまは急に熱湯およ浸せ血乃先ん  
 換へく足ししく膏もしく初ぬ湯  
 しく洗い流すよあつて流る浸る海  
 すまか







丁早斗なる里田乃本領のこころ入の裾さうかけ  
 上に兼て着く山岡にゆくまげにおうさうさう  
 なるあるとすのけ小杉への道おへてへとふ  
 二秋もそ方一以者なるけをなすしあひあへと見ま  
 には跡もほいき里斗もけはは彼男のあう旅  
 の人まづくよりいげへ越へぬや又何の用よふ  
 流ふ余もあう秋の都ぐくの醫者なるが家山乃  
 於へ志くすのこしへ山山はけふよりをと  
 彼地よ遠るも志はらんやと詞をいふうが志は

足とも道しとさるに彼男の子けさむふさう  
 美よといはれぬしきか人まらんぼくも肝要あり  
 そとならも海くあんトくすも家山に足は家の  
 流る山は盤冒の地なまの種なくあふけも出ぬ  
 丁一り一年玄格とへる醫者都方より家山一  
 丁めいしけ人まらんぼくも強く醫者もよふわく  
 其の家業大よりけとそとをき流ハ所醫がうそ  
 技持とよより場りり目さ所一は盤冒らう是と  
 七まんがりのよきまなりとそとちも玄格先種ふ







さるの如きいふりしといひく遠くせしと遠近の人  
多くさる珍視とて山人よむとむかく客舎を夜群  
集せしふ一ツ系站乃庵二は男は中し海に出よ  
富山の人もよとめて是ら也

名立崩

如後ふ多魚川とて江に注ぐのらに名立とて山  
ありと名立下名立と二つ小舟とては船敷多くは家  
建七大よとてくはさあくも船敷の山なるは下  
とに南の山は負ひて小海に降る地なり也

に今年より二十七年以迄よと名立とて山  
二つ小舟とて海中に家あり入一踏り人馬竊大と  
くく海を没入とてら日とて山の所今も其  
まうま白うとて壁乃とてまう今も世帯下名立  
よ一高しとて水は人よ其まうとて中もとてゆと下  
はとて水城ゆとてしとてふと名立乃馬ハ海邊乃  
中がまはとてとて漁網とて家業とてすは其夜ハ  
風静しとて天を好よとて海とてあつとて一驛  
の者ども夕をりしとて社を建てとて鑿鑿の如とて物よか













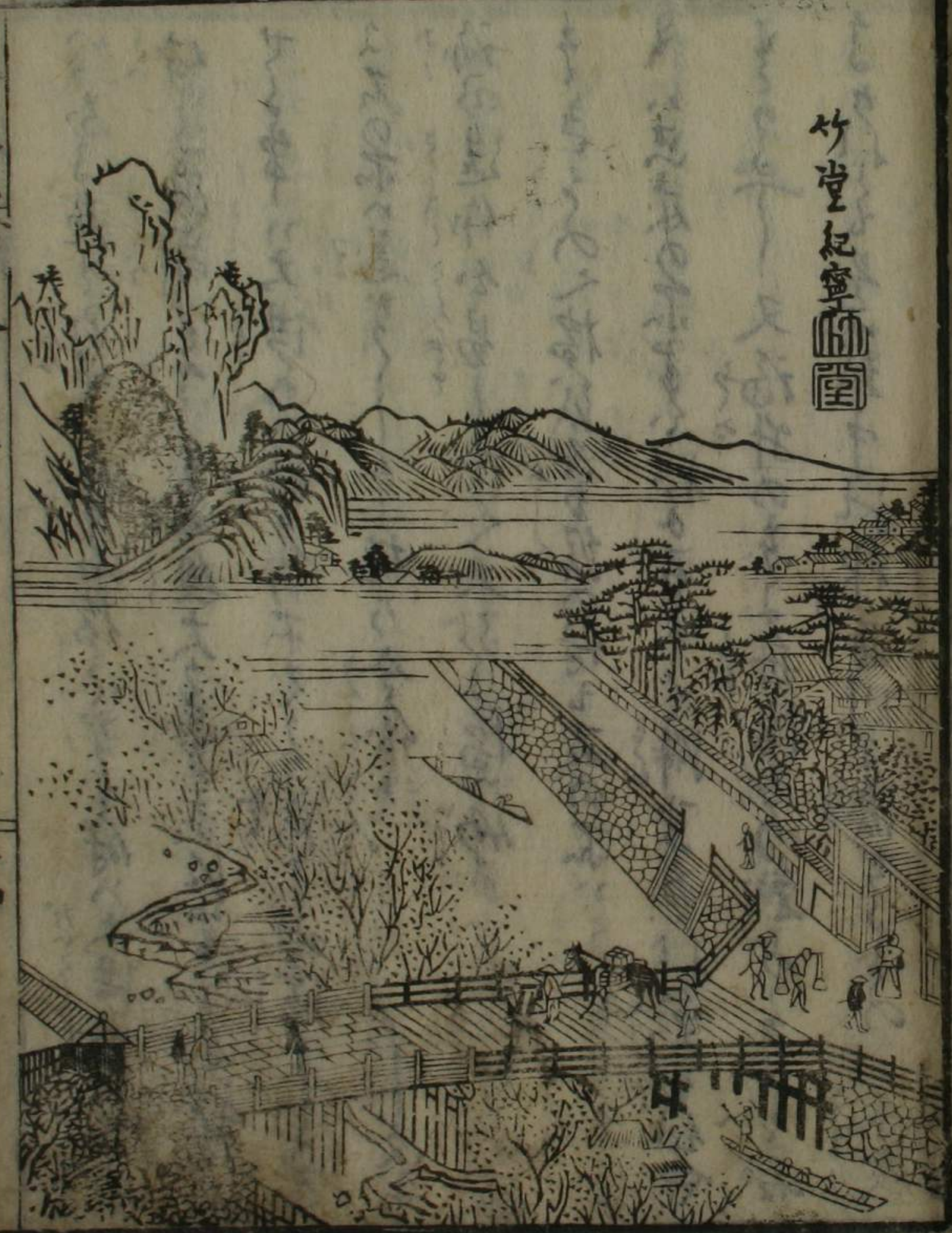


みくハ形乃重必蔽之甲中<sup>の</sup>て絶頂<sup>の</sup>水田<sup>あり</sup>く  
農家あり<sup>そ</sup>外に<sup>ま</sup>け<sup>る</sup>て<sup>い</sup>り<sup>ん</sup>減<sup>り</sup>し<sup>き</sup>や  
實山と<sup>い</sup>ふ<sup>へ</sup>き

九十九橋

越前<sup>の</sup>福井<sup>の</sup>所<sup>の</sup>中<sup>に</sup>文<sup>の</sup>川<sup>あり</sup>川<sup>の</sup>上<sup>に</sup>九十九橋<sup>あり</sup>其<sup>の</sup>大<sup>き</sup>き  
餘<sup>の</sup>橋<sup>は</sup>石<sup>の</sup>橋<sup>あり</sup>石<sup>の</sup>橋<sup>の</sup>大<sup>き</sup>き  
舟<sup>の</sup>下<sup>を</sup>流<sup>す</sup>る<sup>の</sup>舟<sup>あり</sup>舟<sup>の</sup>大<sup>き</sup>き  
舟<sup>の</sup>下<sup>を</sup>流<sup>す</sup>る<sup>の</sup>舟<sup>あり</sup>舟<sup>の</sup>大<sup>き</sup>き  
舟<sup>の</sup>下<sup>を</sup>流<sup>す</sup>る<sup>の</sup>舟<sup>あり</sup>舟<sup>の</sup>大<sup>き</sup>き

竹堂紀實





いづれも所と改めよはる石橋とかなし時ハ大洪水の時全  
 体しよに崩れしを 其無異大くさすは中よ本は橋よ  
 せし中ハ大洪水の時本の不むり落て水没まてて  
 石の示い恙なくし橋乃今体換ざるしなり故に  
 橋乃造作公易しとて大なる橋ハゆの力橋もかくば  
 とききその之橋は常磐の付も石の示いお載不朽か  
 一ハ只本の示いよむむなるしと淋半かたはるるゆ  
 ともつと一又福井の示い舟橋あり教ありとて名  
 多りれども是ハ越中ハ神通川は海せるものよ不及

越中乃神通川を富山の城下の所は中流に流るるを又  
 一とて示い山流く水玉のくさるは毎春二月の流不  
 るに全解乃水村のふと塔舟ありと倒すは方の流  
 水のくさるは風まの橋り水風ハ水城は先を南  
 より水の海は流る川はたよりがのくさるは海は水あり  
 正に急流なるは常磐乃橋は筑了す事しはくは川をり  
 されしは毎橋と金流とくさる先も西乃界も大なる  
 柱は建くくものたより柱大なる欄とニ勢川流















ア一其子の二帝昇降せしと見えたり具附の  
傍に之をむくむく一と見づくくおとりの世姓の  
よ板小書付する帳名文章の能義の事と云  
ふせる成文あり名具せし書物讀ておもよむ文  
章の東山園より代伝及さる事くと云ひ  
大子感はいつたうのてとて讀く見ると芭  
蕉翁の奥の細道といふ書に記する代傳の  
る事と云ふ文章之書物に和文の事と記す  
道に記す事と芭蕉といふ名とに記す事と

昔なるにこれの誰が目おもよきと見ゆとせよ  
ア野よりくく金殿にあり本社といはて下金殿に  
ア神代乃金殿とて玉垣のいりて其巾小谷に  
美より是と見るに誠は希代の神代乃金殿各  
海氷状の具潮の色赤きあり青たゆり  
口の釜皆海の色成異に其地あり急な  
る出く水の色と云ふも毎年七月十日早曉社  
齋戒沐浴し水浴と汲水し事と云ふ事  
何事ともせよはは愛美ある時と云ふ事

東遊記 卷之二 十八







かひしと云傳小伝こでんもいとも是と身常みじょうのおりんく  
奇きしと云傳こでんもいとも是と身常みじょうのおりんく  
了神おともいふし揚州やうしゅうの石の寶殿ほうでんと破金やぶかねの寶殿ほうでん  
小奇物こきぶつなり

東遊記卷之二



